



- 話に遊び 輪を結び 座に集う -

第四回 いまここにも開いている民話の入口
『食わず女房』を考える

いろいろな『食わず女房』

—わたしたちが聞いた語りの中から—

第四回 いまここにも開いている民話の入口
『食わず女房』を考える

いろいろな「食わず女房」

—わたしたちが聞いた語りのなかから—

—もくじ—

一 「口のねえ嫁ご」(伊藤正子さん…大正一五年生・登米市迫町)

3頁

二 「飯食ねえ嫁ご」(佐藤玲子さん…昭和六年生・栗原市一迫)・故人

5頁

三 「飯食ねえ嫁」(成田キヌヨさん…昭和七年生・青森県十和田市)

7頁

四 「口のない嫁ご—鬼打ち木の由来」(永浦誠喜さん…明治四二年生・登米市南方町)・故人

12頁

五 「御飯食わないおがだ」(小笠原正子さん…大正一一年生・宮城郡松島町)・故人

15頁

六 「銭洗井戸とげじき坂」(八島友三郎さん…明治四二年生・伊具郡丸森町)・故人

16頁

口のねえ嫁くちよめご

むかあしむかし。

あつところに、うんと欲たがりな男おとこがいたつたんだと。

もう、とにかく、

「銭しえにつこぼり貯めでえ、銭つこぼり貯めでえ」

と、いっしょけんめ稼かせいでたんだと。

ほだげつとも、年頃になつて嫁よめご欲しぐなつたんだね。

〈嫁よめごほしいげつとも、お飯まめか食れつし、着物いしよは買わねげねえし、おれが貯める銭つこ少なくなる。口のねえ嫁よめごいねえもんだか〉

と思つて、神さまさ拝んだんだと。

「口のねえ嫁よめご欲しいから、どうぞ口のねえ嫁よめご授まづけでけらえん」

つてね。そしたら、ある時とき、

「こつちで、口のねえ嫁よめご探たづねしてつうげつども、おれ、口ねえんですが。お方がだつこにしてけえんか（女房にやうばにしてくれませんか）」

つて、女おなこの人が来たんだと。見たら口がねえ。

〈ああ、こりゃいい。口がねがつたらお飯食ねべ。お飯食ねがつたらおれもなんぼ稼たいでつて、米も溜たまるし、金持ちになんがいい〉

と思つてね。

「ほだらば、おれのお方がだつこになつてけらえん」

つて、さつそく嫁よめごにしたんだと。

さあその嫁よめご、いっしょけんめ仕事はするし、家えのことはするし、お飯は食ねし、これはたまげていい嫁よめごに当あたつたと思つて、男おとこは、喜んでいっしょけんめ稼かせいでたんだと。

ところが、男が倉ぐらをまわつてみるとね、いっぺえつ積たんでた米俵こめだわら、なんだか減へつていゝんだと。

〈はて、なんだべ。あんなにあつた米、こんなにねぐなる。盗ぬすまれたようでもねえし。おら家の嬢がが、口がねえから、お飯食ねはずだけつとも、あの嬢がが、なじよにかしてんでねえべか〉

つて、その日、男は稼かせぎさ行いつたふりしてね、隠かくれて見てたんだと。

そしたらお方がだつこ、男が出はつたあとにね、倉ぐらから、米、俵たわらで担かいできたんだと。そして大きな金おさね、ざわざわと入れて、いっぺえお飯炊めいて、大きな白焼しろやぎ飯めし（なんにも味つけしていないおにぎり）、山やまのようになぎつて、いっ

ぺえに並べたつけどつしや。

へなにすんだべ。もしか、食うんでねえがなあ

と思つてみてだつけ、お方、髪をばっさりどふぐした(ほどいてひろげた)と思つたら、頭の中さべろつ、べろつと焼き飯突っ込んでいぐんだつたと。

へなんだ口ねえと思つたら、頭に口あつたのが。口のある嫁ごもらつたより、よけいに食れるもの、まずこんでわがんねえ

と思つて、そこさ出はつていったんだと。

「お前口ねえからいいと思つて、嫁ごにしたら、そんなにお飯食うのが」

つて言つたつお。

「やや、見られでしまったがは」

つて、お方っこ、すっかり化けが剥けてね、鬼ばばになつて、

「なにい。こんど、お前どごも食うぞ」

つて、男さ向かつてきたつつお。

さあ、男はおつかねぐなつて、走で逃げたつお。鬼ばばも早い、早い。すぐ追つつかれそうになつたんだと。

沼つ縁、ずうつと走でいったらば、そこさショウブとヨモギがいっぺえ生ぎでたどこあつたから、その中さ、さつと隠れたんだと。

そしたら、鬼ばばが来て、

「やあや、ショウブとヨモギの中さ、隠れたんでは、おれ、とつても食うようねえな。おらの身体、ショウブとヨモギの中さ入つつど溶けんだおやあ」

つて、あきらめて帰つていったんだと。

それが、ちようど五月五日だつたんだつてね。いまでも、五月の節句に軒端さショウブとヨモギを挿すのはね、鬼が来ねえように、鬼祓いのために挿すんだどつしや。

えんつこもんつこ さげした

みやぎ民話の会叢書第九集

『母の昔話』を語り継ぐ―登米郡迫町新田の民話―より

二 佐藤玲子さんの語り

めしか
飯食ねえ嫁ご

むがすむがす、ずうつとむがす。

あるどごろに、うんと欲たかりな母さまと息子といたつたんだどつしゃ。

息子、年頃になったから、嫁ご欲しいなと思っっているうちに、世話する人あつて、もらつたんだと。

その嫁ご、稼ぐも稼ぐけつども、ご飯もうんと食う嫁ごだつたんだと。

欲たかりな母さまだから、寝てて考えたんだと。

「この位え、稼ぐ嫁ごだもの、食ねえで稼がせたらば、もつともつと、身上、上がんべなあ」

そして、先には二膳食べてたの、こんどは一膳おわるとにらみつけ、だんだん、だんだん、あてがうの減らして、御飯がお粥になり、お粥が重湯になり、それでも、稼がせなあ、稼がせなあ。寝る間もなく稼がせたとしゃ。

食ねえで稼ぐのだもの、嫁ごはだんだん痩せて、こけて、干からびて、とうとう死んでしまつたんだと。

お葬式の時ね、息子のほうはやつぱり添つた仲だから、

「埒もねえことして、殺してしまつたなあ。食せねえで殺してしまつたなあ」

つて、お墓さ参つて、帰つとこしたら、後さ、女、立つていたんだと。

して、女、言うんだと。

「おれは食ねえで稼ぐから、おれどこ、お方にしてくえんか。(妻にしてもええないか) おたのみす」

息子と母さまはよろこんだあ、よろこんだあ。

「食わねえで稼ぐんなら、この位えいいことはない」
つてね。

さつそく嫁ごにしてみたつけ、まあず、稼ぐは稼ぐは、はつぱり食ねえで稼ぐから、たちまち土蔵倉建つたんだと。

ほだけつども、だんだん息子のほうは、

「おかしいなあ。食ねえで、この位え、稼げるもんだべか」
つて思うようになったんだと。

それで、ある日のこと、息子は出かけるふりして、障子の穴っこから、まがつて見たれば(こっそり見てみたら)、嫁ごは、馬の水釜さ、カマスで米持つてきては空け、持つてきては空け、どんどん火い焚いて、ご飯炊いたつたんだね。

そして、杉戸はずして、その上さ、熱いご飯、やぎ飯(おにぎり)にぎつて、山の位え、ずらーりならべたんだと。

こんどは結^ゆつてた髪をざらんと解いて、髪をわけたら、髪おっのなかに大きな口あつて、その口のなかさ、やぎ飯を、

おまんちち べろべろ

おまんちち べろべろ

って、あやこつきみでえに、入れるんだと。

馬の水釜いっぺえ炊いた、どつさりのやぎ飯だもの、人が来ねえうちに食ってしまわなげねえもの、

おまんちち べろべろ

おまんちち べろべろ

って、おまじないを言いながら、頭の口さ放りこんでね、あつという間にたいらげてしまったんだと。

そしてまた、しゃつと髪を結って、なに食わぬ顔してすましてたんだと。

それ見たから、息子はもうおつかねえやら、びっくりするやら、えれえ声出して叫^{さか}んだと。

ひえーっ

そしたら、その女、

「おれどい、見だなあ」

世にもおそろしい声でふり返^{けえ}って見たから、息子はもう腰抜かして、それから病気になって寝こんでしまったんだと。

女は見られたから、この家えにはいられないとて、どつか

に消えて行ってしまったんだと。

息子はそのまま寝ついてしまったし、嫁よめが行ってしまったとたんに、土蔵も倉もみんななくなつて、またもとの貧^{びん}乏^{ぼう}暮らしになつてしまったんだと。

ほだから、欲たかりして、食ねえで稼かせげつて言つてはわがねえものだつていう話です。

こんで、えんつこもんつこ さけた

みやぎ民話の会叢書第六集

「栗駒山南山麓の昔語り むがすむがすずうつとむがす」より

三 成田キヌヨさんの語り

まんまか
よめ
飯食ねえ嫁

むがあしむがし、あつたづもな。

むがしに、ある村に、オンジあつたつて。砂子瀬すなこせ（中津
軽郡西目屋村。キヌヨさんが生まれたところ）では、だ
いたい嫁つこもらうにいい年ごろになつた若ものを、オンジつ
て言うの。長男でなく次男、三男の若ものを呼ぶときに使
うの。

「いやあ、お前めえも嫁もらう年だ。嫁もらわねえばねえがら、
嫁めつけでける」

つて言つたつて、そのオンジ、
「ああ、嫁があ。生まれでがら死ぬまで、飯食めしかねえ嫁だばも
らつてもいい」

つて言つたんだつて。
「ばがあ、あれ。もの食かせるのいだましくて、あつた話して
る。だれもあつたのさ世話しねえ」

つて、だれも相手にしねえで、かまわねでいだつたづ。
あるどき、きれいな背おっの大きな女おんなが、

「どこさ行つても、死ぬまで飯食ねで稼かぐがら、なんとか嫁つ

こにしてけろ」

つて来たづもの。さあ、そのオンジ、
「飯食ねぐれありがたいごとねえ。どれどれ、んだら」

つて、まず家さ連せでつて、嫁にして置いだ。何日したつて、
朝間起きれば、朝の飯はちゃんと支度してゐるのに、嫁は、
飯食くうようすねんだづもな。

「なにが食つたらいがべ」

つて言つても、

「いやあ、吾わあ飯食つたごとねえ」

「いやいやあ、良塩梅いあんべした。こつたに飯食ね嫁、世の中にあつ
たもんだ。ああ、よがった、よがった」

つて、いだつたづもの。

あるどき、オンジが山さ仕事に行つてゐる間に、となりの
婆ばあさま、

「どこに、飯食ね嫁なんてあるもんか。普通のものでながべ」
つて、こそつと垣根がらのぞきに来たづおん。

その嫁、オンジ出はつていったあと、倉がら米一俵まる
ごと持つてきて、大きなトナ釜（馬に与えるえさを煮る釜）
さ、飯炊いだづ。飯できだと思つたつて、こんだあそれを
握つて、戸板外してきて一俵の飯だもの、いっぱい並べた
んだとな。

「いやあ、なんだべ。誰が来て食うのだべ。なにはじめん

だべ」

って、婆さま隠れて見でらったづもの。

そしたら、だれもいねなあどまわり見て、髪といたら、頭のとっぺんに大きな口があったづもの。そこさ、おにぎり、一俵ものおにぎり、アヤコ（お手玉）やるように、どんどんどん投げて、いっとこ間に食ってしまった。そして、まだ髪ゆって知らねえふりしていただったづもの。

いやあ、となりの婆さま、動転どてんしてしまつて、

「オンジ、オンジ。いまにお前の倉に米なくなれば、おらも村の人どもみな食れんのだぞ。お前、ほった化けものあずがってだ（養っていた）んだあ。出してやれ」

って言つたづおん。

「何したつてせえ。まあさがあ。吾あいねうち、食つてるわけながべ」

って、倉みたら、倉の米あらがだねえづう。さあたいへんだ。

「いやあ、お前。よく稼いでけで良いいたつてなあ。明日家あすさ行つてもいいや」

って言つたづおん。

「ほお。行げづうなら、行くべさあ」

って、ぐいっといなぐなつたんだづもの。

それから何日もしねえうちに、まだ欲ばりだもの、

「いやあ、糸もなんも買つてけなくても、朝から晩まで機織はたおる女欲しい」

つてなつた。まだ、村の人ど、

「ありや、あのホイド（欲ばり）めやあ。まだはじまつた」

って、だれも相手にしねえ。そうやってたつきや、きれいな良い娘が、

「いやあ、糸もなんもなくても、朝から晩まで機織るがら、なんとか嫁っこにしてけで」

って、まだ来たづ。まだ家さ置いて、倉の脇に機置いた小屋あつから、

「糸もなんも買つてけなくても、機織るんだもの。んだら、飯食つただつていい」

って、飯食せだづもの。そしたつて、

「吾あ、機織りにいぐがら」

って、その小屋さ入つていった。外にいて聞いてれば、トンカラトンカラつて機織つてるづものや。

「おやあ、良塩梅した。こんどこそ儲けだあ。町さ行つて売つてくれればなんぼ、なんぼになる」

ど勘定して、

「はあ、良がった、良がった」

って、喜んでいだつたづもの。となりの婆さま、まだ、「どこに、糸もなんも買つてけねえで機織るつてか。おら、

山がらカラムシとつてきて紡いで、やつと糸にして、ひと冬に一反か二反織れば、いい機織りだつて褒められた。どこに、糸もなんもねえで、機織つてるつて、聞いたごとねえ。どれ、見にいってみべえ」

つて、こつそり来て、小屋んどこにきて、こそつと戸を開けて見たづおん。

そうしたら、大きい山の蜘蛛が、機の上さ乗つかつて、お尻がら糸を出して、そこらじゅう蜘蛛の巣だらけにして、音だけは機織つてらように、トントントント音させていだつたづもの。となりの婆さま、

「オンジ、オンジ。お前ものぞいてみる。いまになんもなくなれば、お前もみな、あの大きい山蜘蛛に食れんのだぞ」
つて言つたんだと。

オンジ、婆さま言つたとおり、のぞいて見たづおん。やつぱり、大きい山蜘蛛が、機の上において、そこらじゅう蜘蛛の巣だらけにして、お尻から糸出して、トントントントと機織る音させてらつたづ。いやあ、まだの、オンジだもの、「出はつていげ」

つて出してやつた。

それでやめればいいものよお。まだ少ししたつたら、「出汁だしもなんも入れなくても、旨え汁うめつゆ飲ませる女すがた欲しい」
どなつた。これも、まだ仕方ねえ。

そうしてるうちに、

「出汁もなんもいらね。おらあ、朝間から晩まで旨えお汁飲ませる」

つて、女、来たづもや

「おや、良塩梅した」

つて、まだ家さ置いだんだと。

となりの婆さま、のぞきにきたつけ、大きい鯛の化けもの、鈎かぎヅキ（囲炉裏の鈎）さ鰹えらをひっかけて、大きな鍋さ自分の尻尾を入れて、わやあわやあつて出汁とつていたつたづおん。

「いやあ。まだの、こつた化けもの置いでる」

つて、こんどもまだ、

「オンジ。いまにお前も食れるべ。おらあも食れる。あつたの出してやれ。あんな化けものばりお前集めで、ばがでねえのが」

つて言つたら、オンジだもの、

「いやあ。お前、明日家さ行げよ」

つて言つたづおん。その女、

「はい、行ぎす」

つて言つたづおんや。

「ああ、よがつた。うまぐいつた」
ど思つてらつけ、

「いやあ。そならば、吾あ家に行くがら、倉にある大きい味噌樽ひとつけでけろ」

って言ったと。

砂子瀬ではね、味噌作るっていえば、人数も多かったからね、二年おきにだけでも、豆一俵をね、大きい釜さ立てて、それを蒸し煮にするの。それはうまかったんだよ。

「いい、いい。なんでもいいがらせる。早く出てってけろ」
って言ったづもの。

したら、朝間に、オンジ飯食って一服して、横座さ座っていだと。そしたら、

「いやいや、二、三日だけでも、世話になりましたじゃ。行ぎす」

って、いまにもその樽、背負っていぐばりにそばさおいて、煙草吸ってたオンジを、あぐらかいたまんま抱きあげると、その味噌樽さどんと入れて、それを背負うと出かけたづものや。

「いやっ、たいへんだ。化けものに食れでしまう。どやって逃げだらいがべ」

って、なんぼ勘定したって(考えたって)、化け物だもの、どんどん山さ行くづもの。そしてるうちに、山の方がら、

「おおい」

って音したと。オンジを背負ってた鯛の化けもの、山に

向かって、

「おおい、いま来たよお」

って叫んだと。

「連できたがあー」

「うん、背負ってきたあー」

「大きい鍋かけでだから、早く来い。みなして煮て食うべしよ。どこに、世の中に飯食ねえ、糸もねえで機織る女欲しいって、そっただ欲たがり生かしておいてもなんねえ。みなして食ってしまうごとなった。早く来い」

って、音がする。そんだって休むわけでもねえ。どんどんどんどん行ぐんだって。

「いやあ、たいへんだ。どやって逃げたらいがべ」

って、樽の中で立ってみたって、一俵も豆入るくれ大きい樽だもの、どうしようもねえ。なんぼ化けものでも、どんどん走ってるうちに疲れたんだべさ。大きい木の根っこさ休んだづおん。その木の枝が良塩梅に樽の中さなびいて、オンジ、その枝につかまって、やっと樽がら抜けだして、木の上さ隠れたづおん。

大きい樽背負って休んでだ化けもの、むっくど起きあがると、オンジが入ってらど思って、そのまんま山さ向かったづおん。

その間に、オンジ逃げたんだおん。いま来た山道、どん

どんどん逃げてたづもの。

化けもの山さ着いたれば、樽を下したづ。

「大きい釜の湯が煮だつてだ。さあ、欲ばり男を煮て食うべし」

って、樽の中見たら、入^へえつてねがつたづもの。

「あつ、逃げられた。へば、あの休んだどこだべ」

って、追^ほつてきたづものやあ。だんだんにオンジの後ろさ、化けものど見えて来たづもの。なんぼ走^{はし}だつて、見えんだづおん。

「いやあ、困った。どうやったらいがべ。つかまえられだら食れでしよう」

どつて、まわり見たつけ、ショウブとヨモギがいっぱい生えたどがあつたんで、そこさ、ほんと跳ねて隠れだづおん。

その化けものど、そこまで来たつけ、

「ばかつ、このお。このショウブとヨモギの中さ隠れたべ。おらんどは魔物だ。ショウブさつかまれば、もう骨が見えるほどきれでしよう。ヨモギさつかまれば、手が火傷して、指もなんも溶けてしまう。んだがら、ショウブとヨモギの中さ入れねんだ。お前、命拾いしたな。これがら、こつた悪いごと考えんなよ。お前さ命けでいぐ」

って、山さ戻つて行つたづおん。

オンジ、そこから出はつて、

「いやあ、魔物づうのは、こうやって、ショウブとヨモギ好きでないんだ」

って、それがら、そういう魔物が来ないようにいうまじないで、屋根さショウブとヨモギを挿すようになったと。

今でもね、やってるどがあつてね。あるどき、十和田近くの郷土館に行つたらね、若い奥さんみたいな人が、一生懸命ショウブとヨモギを束ねていたの。

「これ、何にするの」

ってきいたら、

「わがんねえ。年寄りど、なんだがまじないに使うつて言つてた」

って。そのショウブとヨモギを挿す意味がわからないで、若い人たちは、わけわからないで、ただショウブとヨモギをなんかのおまじないに使うつて、それしか知らないのね。

そういう話を母から聞きました。

(記録 加藤恵子)

四 永浦誠喜さんの語り

口のない嫁ご—鬼打ち木の由来

むがし。

あるどごろに、ひじょうに欲の深え若え男あつて、嫁さんもうののに、食しえるの惜しくなつて、

「口のある嫁ごもろうと、食しえなくてわがんね。働くことだけは働いてもらわねげなんねえけつとも、口のねえ嫁ごだれば食しえつことねえから、口のねえ嫁ごもらいでえ」
つて語っていたんだと。

ところが、どごでそれを聞きつけたか、ある日の夕方、口のねえ若え嫁ごあ、来たんだと。

口ねえから、のっぺらぼうだけつつも、鼻と眼だけはあつたど。

そこで、どごから声出したか、とにかく、

「おれどご、嫁にしてけらいん」
つて来たんだと。

「そいづは、ありがてえことだ。おれ、あんだみでえな人を尋ねでたどごだ。いい、嫁ごになつてけろ」

つうことで、その人を家さ、置いたんだと。

それから一週間ばり、毎日食しえねえでいつしよにいたが、全然元氣も同しだし、なにも食ねえで、水も飲まねえで暮らしてるし、なんぼ欲たかりでも、不思議に思つたつんだね。んでえ、

「おれ、用足しに出かけてくつからな。たのむぞ」

つて家出はつて、はあ、片陰（片一方が物の陰になつているところ）さ隠れて、

〈おれ、留守にしたら、なにかあつかしんねえ〉

つて見ていたど。

中の様子うかがっていたら、そいづを知らねえ嫁さんが、米倉の戸お開けて、五斗入れ一俵背負つてきたんだと。

〈なんの真似すつとごだ、あれ〉

つて思つたら、ムシロ敷いて、そいづさ米みな撒けたど。して、大きな平釜、一俵くれえ煮られるやつ、そいづに水汲んで、火いどんどん焚いて、ぐらぐらと煮立つたどごさ、米、研ぐもなにもしねえで持つていつて入れたんだと。

そして、ご飯になつたどき火い止めて、大きなタライさ空けて、今度あいつしよけんめいになつて、塩、手さつけつけ、おにぎり握つて、ずうつと並べたんだと。

それから今まで結つてた髪ほぐしたど。したば、頭のてっぺんに大きな口あつて、ぼんつと、おにぎり投げてやつたど。

ほんつ、ほんつ、ほんつと投げやると、頭の口がみな受け止めて、たちまち、はあ、それみな食ってしまったんだと。して、もとのように髪を結って、知らん顔してたんだと。

「口のねえ嫁ごだつうからもらったが、とんでもねえことだ。こいづあ食い倒されてしまう。これは実家さ送っていがねげねえ」

若え者は、それから考えた末に、言ったんだと。

「お前、実家ごだつけ。ごごさ来てから十日ばりもするから、そろそろ実家さ挨拶に行がなくてわがねっちゃんね」

「ああ、そいづは、良がす。ほんだら、行じやつてけらいん（一緒に行ってください）。ただ、行く途中にヨモギとシヨウブのある野原あつて、その中行ぐと、おれのお尻腐れてや、命なくなっかもしれないねえから、おれ、入るくれえの大きい桶さ入れて、おれご背負って行じやつてけらいん。そごまでは歩いて行んから」

「いい、いい。そんなこつたら。そごさ行つたら、たちまち、おれ、背負って行んから」

って、桶背負って行つたど。

そして、ヨモギとシヨウブのあるごごさ来たとき、

「ごごで、おれご背負ってけらいん」

って言うから、桶さ入れて、そいづ背負って、ずっと行つ

て、ヨモギとシヨウブが一番生えでるごごを通り越してから、

「おれ、小便出つからな。こいづ背負ってでは、重たくてわがねえから、ちよつこら降ろすからな。またすぐ負ぶって行んから」

つうことで、桶そご置いて、あとあ一目散にヨモギとシヨウブの中さ逃げ込んだと。

嫁ごあ、そのあたりをぐるぐる廻りながら、

「この中さ人つと、おれ、お尻腐れて命なくなってしまうから、入られねえしな」

って、すぐごと向こうの方さ帰っていったど。

して、若え者は、とにかく、

「良がった、良がった。あいづに食い倒されつごごした」

って語りながら帰ってきたんだと。

でえ、それがちょうど五月の四日の日だったんで、それから、ヨモギとシヨウブを軒下さ挿して、悪いものが入んねえようにつとつとで、つまり、嫁ごあ鬼で、大きな口あつておにぎり食つたのだから、そういうふうな鬼が来ないようにつとつとで、いまでも軒下さ挿しているんがす。

ところが、なんぼ口のねえ嫁ごでも、下の口あつたらしくて、いずれ、夜には仲良ぐしたらしいのね。

でえ、嫁ごの腹さこども入って、十月十日たつたら、男

の子あ生まれたんだと。鬼の国で大切に育てていたが、まあ、七つ八つになったところかね、額ひてこびさ角つのっこ生ほげてきだ。んでも鬼の子だちや、

「お前、人くっこ臭くえ。人間だべ。おら、お前と遊ばねえ」

って仲間はずれにされて、いつでも泣いて帰ってくんだと。

それでなんぼ鬼のお母がつあんでも、かわいそうに思っ
ね、

「したら、お前の親父おやじあ、こういうどごさいっから、送って
行いんから、行いんじゃ」

って連れていったど。門口もんぐちさ近ちかくなつたどごろで、子
も置いてお母おつあんは帰かっていったつたど。

そしたら、今度あ、人間の子どもたちが、

「お前、鬼の面つらっこして、角つのっこ生ほげでつから、鬼だべ。鬼
の国の人と、おら、遊ばねえ」

って、人間の世界でも、友だち、遊んでくれねがつたど。
仕様しやねえから、まだの親父おやじつあま、鬼の方かたさ送おって
た。したれば、

「人ひとっこだから遊ばねえ」

って語かたって、まだの、いじめられてわがんねえから、そ
んでまた、鬼のお母おつあんが送おってきたど。

送おってきたことはいいけんども、門口もんぐちまで来て、あと、

帰かってしまったつけど。

その野郎やろっこは、とつても中ちゆうさ入りかねていたが、丁
度に年の暮くれれで門松立かどでたどごで、マツとタケに添そえ
て、クヌギの木を割かって、角かどあるやつ三本立さんぼんたてで、添そえ木
にしていた。そいづに、野郎やろっこあ、頭かぶぶついで死しんでし
まったんだと。

んでえ、その添そえ木を鬼打ち木おにうちぎち呼よんで、いまでも
ね、門松立かどでつと、かならず鬼打ち木おにうちぎちの立たで、そ
の名前の由来よれはそういうわけなんだと。

こんで よんつこもんつこ さけたどしや

みやぎ民話の会叢書第十集

「登米郡南方町の民話 青島屋敷老翁夜話 上巻」より

五 小笠原正子さんの語り

御飯食わないおがだ

むがし、一人で暮らしてる、職人の男の人あつて、

「誰が、御飯の食わねえ女の人のいねがなあ」

っていだんだと。食わせんのやんだんだべね。

それを聞きつけて、山姥が、

「わだし、御飯も何にも食べねで、一生懸命働くから、わだ

しどご、おがだ（女房）にしてけらい」

って入ってきたんだと。それで

「うんで、おがだにすつから」

って、おがだにしたら、ちゃんと、ほんとに尽くしてく

れんだと。

毎日毎日、御飯食わないで、男が

「腹へっから食べろ」

って言っても、おがだは、

「食べねがら」

って言うんだと。

ほんでも米だつて何だつて、がさがさがさが、ねぐな
んだと。おがだに、

「米買うお金けらいん」

って言われつから、男は

〈何だつて、そんなにやあ〉

と思つてたんだと。ある時、

〈これは、おがしいなあ〉

と思つて、

「やあ、働ぎさいつてくつからなあ」

って出でいぐふりして屋根さ上がつて、空窓がらのぞい

でだんだと。

そしたら小豆をといだり、米をといだりして、小豆御飯

炊きはじまつたつけど。そして、鯖を六本も焼いだり、浅

葱を湯がいだりして、それから、小豆御飯でおにぎりをい

ぱい作つたんだと。

〈あんなに作つて、なじよして食うんだべ〉

と思つてだつて、髪、ちゃんと結つたのを、さつぱど

ほどこいだんだと。そうしたら、上に大きな口あつたんだ

けど。

ほんで、そのおにぎりを、

トントントントン

トントントントン

と全部入れて、鯖六本も入れて、浅葱も全部入れたんだ
と。それからすっかりど髪結つて知らん顔して男の帰りを

待ってたんだと。

ほうしたら、その男はおっそろしくなって

〈ああ、こわい。なんとがして、暇出^{ひま}してやんなくてだめだわあ〉

と思ったんだと。

夕方^{ゆうがた}になってから

「たたいま」

って帰って行って、

「姉^{あね}やあ、おれ、お前^めさ暇^{ひま}けっから、帰^けってってけろわあ」

って言ったんだと。

そうしたら、

小豆御飯^{あずきごひん}のそのせいがあ

鯖六把^{さばろっば}のそのせいがあ

浅葱三把^{あさぎさんば}のそのせいがあ

って、歌を唄^{うた}って、別^{わか}れていったんだと。

そんでえづこさげだんだと

「宮城県文化財調査報告書第一三〇集

宮城県の民話―民話伝承調査報告書―

(発行 宮城県教育委員会) より

六 八島友三郎さんの語り

銭洗井戸とげじき坂^{ぜにあらい}

大昔のこと。いまの清水^{しみず}というところに百姓の男が住んでいだんだけども、まあ、欲^ほたがりなんだべなあ。

「ご飯食^かねえ女房^{おがだ}もらいてえ」

って、口ぐせに言^いってたんだと。

ほうしたところが、ひよつくりと女^{おんな}あらわれて、

「おれ、ご飯食^かねえから置いてけねえが」

と、申し込んできたんだとナイ。

ほうして、一緒に暮^くらしたのはいいけども、女房、ご飯食^かねえわりに、なんだか家^{いへ}の中の米、減^へるんだとなあ。

〈なんだかふしぎだ〉

と思^{おも}って、

「今日は、どごそこさ行くに弁当持^もっていきでえから、やき飯^{かきい}(おにぎり) 一つ二つにぎってけれや」

って、そう言^いって、やき飯^{かきい}にぎってもらったんだと。

ほうして、女房^{おんな}に知^しやれねえように、そつと梁^{はり}の上^{うへ}さのぼったんだと。そこから、じつと下^{した}さ見て晚^{おそ}げまでいたんだなあ。

ほうしたれば、女、三升ざるで米すくってきて、その米
といで、鍋さ入れて煮たんだとナイ。

〈なにすんだべなあ〉

って見ていたば、やがて鍋の米煮えて、いあんべな（い
いあんばいな）ご飯になってナイ。

女、そいつ鉤からおろして、やき飯ににぎって、切板きりばんの
上さたらーっと並べたっつんだナイ。いあんべにみんなに
ぎってしまったからに、こんどは自分の髪の毛さ結つた
の、みなほどいて、頭の中さかくしてあった口、ざんざり
開けて、ペロペロっと入れてしまったんだと。ざーっと入
れてしまつてナイ、知やねぷりしてまた髪結つたんだと。
〈ありや、ふしぎだ。よし〉

と思つて、梁からおりて女房さ言つたんだとナイ。

「なんだ、いまやったことは」

つて。ほうしたところが、女房ぼろぼろ涙こぼしてナイ、
「わたしはげじぎつて者もんで、だれさも相手にされねがつた
けんども、ご飯食ねえつてことで、あんだの女房にしても
らつた。いま、あんださ見つけらつてしまったから、お暇いひま
もらつて行く。ほだけんど、いままで置いてもらつたお礼
として、あんだに授けたい物ある。明日あしたの朝一番、家の前
の坂に馬のぼつてくるが、第一の馬は穀物つけた馬だから、
そいつの首た切つておとせ。そうせば、あんだ、食う物に

不自由しねえ。第二の馬は着物つけた馬だから、その馬の
首た切つておとせば衣類に不自由しねえ。第三の馬は銭つ
けた馬だから、そいつも切つておとせ。金かねに不自由しねえ」
つて言い残して家を出ていったんだと。

男は坂で待つてたんだなあ、刀たがいてナイ。

ほうしたら、お空白しらむころになつて、りっぱな馬きたつ
つんだなあ。

ばっ ばっ ばっ ばっ ば

あんまりいきおいよくて、男、切りつけべと思つうちに
逃げられてしまつたんだと。

ほれで、第二の馬待つてナイ、それもまたいきおいよ
くて、

ばっ ばっ ばっ ばっ ば

と逃げられて、切りばぐつたつもなあ。

〈今度こそ〉

と、第三の馬をねらつていたんだと。ほいつもまたいき
おいよくのぼつてきたつんだなあ。それでまた切りば
ぐつただけんども、追いかけてつて、尻しつっほのどこさ、
ざくつと切つたら、銭ざざーとおちたつつもなあ。首た
切ればたいした金だつたべが、尻しつっほ切つたばりだから、
どどつと銭おちて、それだけだつたんだとナイ。

ほれでも、男よろこんでその銭ひろつて、そこの井戸で

洗ったつうんだなあ。

その井戸が「銭洗井戸」で、馬がのぼってきた坂が「げじき坂」とか「げんじき坂」とか呼んで、いまもそこに残ってあるんだね。

げ、じ、き、つ、つ、うのは、このへんでは化け物のことを言うんだけどもね。

(記録 小野和子)

メモ欄としてご自由にお使いください。

主催：みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム
せんだいメディアテーク

※「民話 声の図書室」とは…

「民話声の図書室」は、「みやぎ民話の会」が45年にわたって記録してきた、宮城県を中心とする民話語りの映像・音声を、せんだいメディアテークと協働し、だれもが活かせる共有財産として、未来へ受け渡していこうとする活動です。これまでに、5名の伝承の語り手による民話語りのDVDが14タイトル完成し、せんだいメディアテーク2f映像・音響ライブラリーに配架されています（閲覧・貸出が可能です）。土地の声で語られる民話に、ぜひ耳をすませてみてください。

助成：一般財団法人 地域創造

<http://table.smt.jp/>

「考えるテーブル」で行われるさまざまなイベントのスケジュールやこれまで開催されたイベントのレポートを閲覧できます。